

系 東

編集 山形村ふるさと伝承館



「昔々あるところに・・・」と語られるおとぎ話

決まったようにおじいさんとおばあさんが登場した。

私達は人生・社会・生き方を昔話から学んで来た

名前もなかった四千五百年前の殿村の堅穴住居址

権力者の歴史とは違う

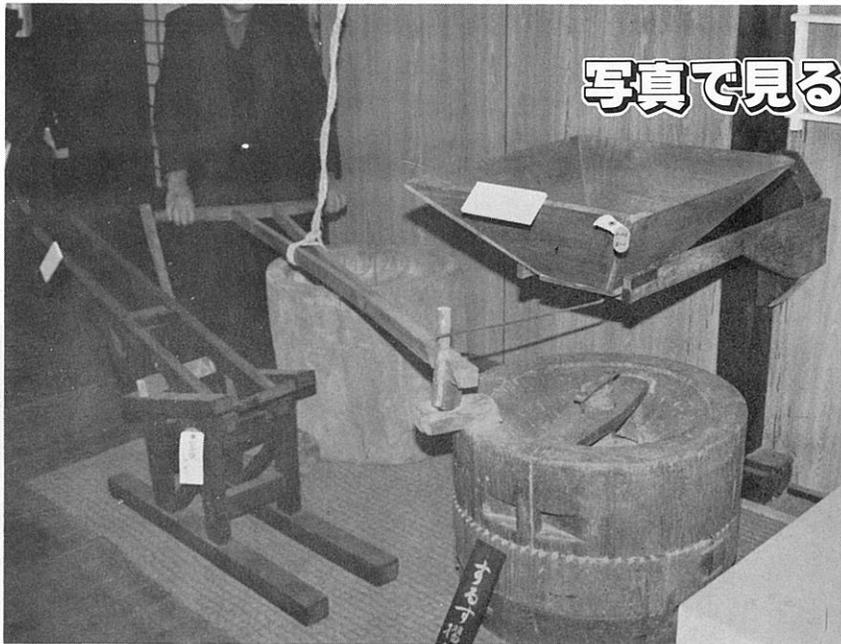
身近で親しみのある私達の歴史

名もない庶民の昔々の物語

ふるさと伝承館は昔話を何でも知ってる

おじいさんとおばあさん

写真で見るふるさと 伝承館



◀ スルス (摺臼)

古くは靱摺りにと搗き臼を使い、杵でついていたが後には靱摺り専用のスルスが発明され、搗き臼は使われなくなった。

初期の摺臼は土を練り木製の歯をつけた土臼であったが、次第に改良されて、遂にこの写真のような摺臼になった。



◀ 笠と簀

日よけ雨よけ用の笠は藁や菅、檜などで作ったが、これは菅笠であり、ヤイベイ笠といった。

簀はこの写真のもののように普通は藁製であるが、北国の方でヒロロと呼ばれる草や藤、科の木の皮で編むこともあった。

普通雨具として用いられるが、秋田県のナマハゲを初めとして、小正月の夜の訪問者が簀を着けてくるのは、信仰にもとづく古くからの約束のようであり、遠い国からの旅をしてくる神の服装だろうともいわれている。また百姓一揆の際は簀笠をつけて出動するのが一般であった。

り、かなり能率的になった。臼の上のじょうごに靱を入り、取手を押し下り、引いたりして臼を回し、靱を摺った。一回転ごとに靱が臼に落ちてくるように工夫されている。

▶ 伊勢人形

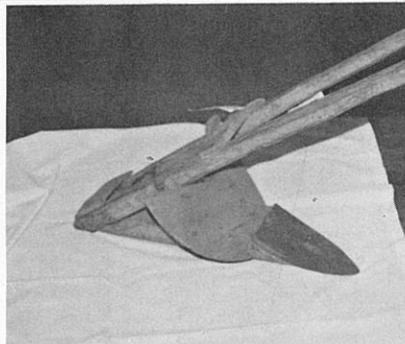
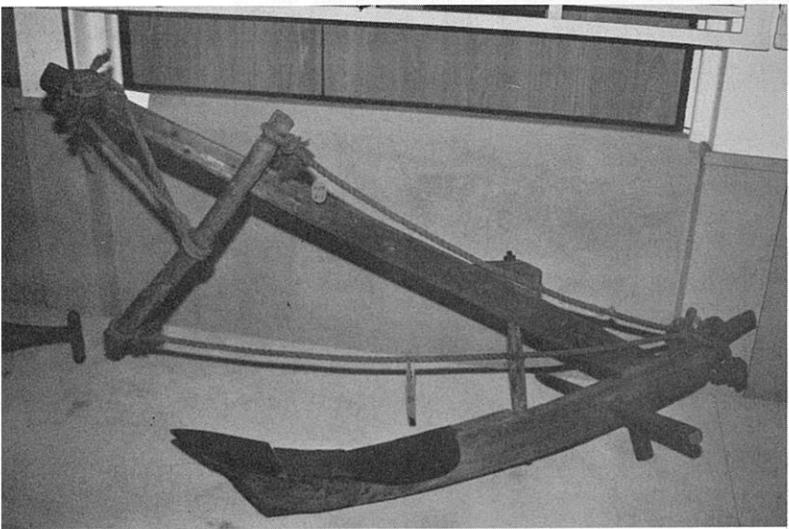
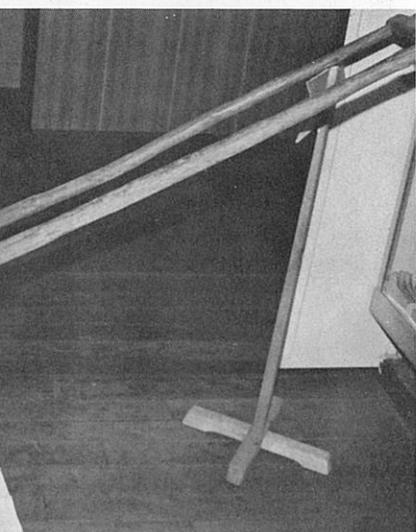
伊勢参宮を目的に結成された信仰団体に伊勢講がある。お伊勢参りの旅費を積み立てて籤で順番に代参人を派遣した。代参人は多くは春の農作行の前か、社の仕事じまいの後であり、また二年参りといつて年末年始にわたるものもあった。

出発の際は全講員が集まり天照皇太神の掛軸を床の間に掲げ礼拝してから、代



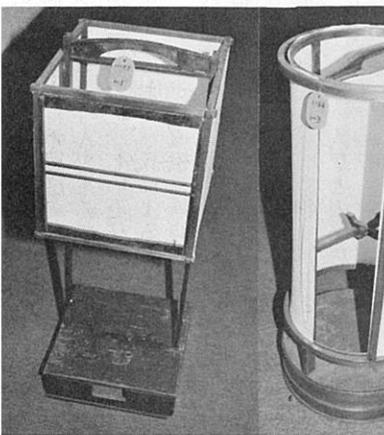
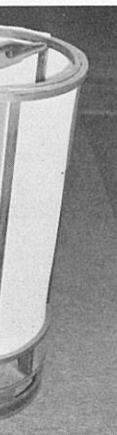
◀ 鋤

鋤は、基本的な農具であり、弥生時代から木鋤は用いられていた。後に鉄の刃先をつけた鋤で、一枚の鉄で出来た。カナ鋤は明治以降とされる。この鋤は足で踏んで田畑を起した。牛馬に曳かせ、田畑を耕した犁は、大正以降とされる。



▼ 行燈

昔の照明具の一種であります。種油や動物の油が使用され灯芯に油が沁みてほのかに燃えての明りであります。又すき間風にも消えないように考えられており当時の生活が偲ばれます。



禿山の神

竹田村講中



ふるさと伝承館

のあゆみ

その2

山形村ふるさと伝承館設置条例設定

山形村ふるさと伝承館管理及運営に関する規則設定

昭和六十二年十月一日

ふるさと伝承館館長任命

昭和六十二年一〇月二十四日

ふるさと伝承館初開館日

昭和六十二年十月

ふるさと伝承館運営審議会制定

昭和六十二年十一月二十四日

運営審議会開催

平成元年二月六日

文化祭の為無料公開

平成元年五月二十日

ふるさと伝承館展示物替

平成元年五月二十七日・二十八日

信濃山形ロードレース大会

参加無料公開

平成元年九月二十一日

ふるさと伝承館第二周年記念講演会

平成元年十二月十七日

シメ縄作り講習会

むらの今昔物語

②

黒川堰



波田町鐘が淵地籍の黒川の水を水路延長十二キロメートル内暗渠七キロ、随道十四ヶ処灌漑面積百五十町歩の歩みは、遠く安政六年上波田村の中島貴右衛門氏外の計画に始まり途中資金難で放棄され百瀬三郎氏外の引継ぎは明治十一年幾多の資金の投入と血と汗の苦勞の末、明治三十九年漸く完成し竹田地区に米が稔りました。それからも番水で水の確保には大変な苦勞を致しました。昭和二十七年初通水より満六十年下竹田公会堂南に記念碑が建立されました。又中信平総合開発事業の施行により昭和四十六年より夢にまで見た梓川の水が常水として堰に溢れております。

又平成元年には右岸幹線唐沢調整池より村内分の取水工事も完成し歴史の駒が大きく廻りました。

昭和四十六年黒川堰揚げ口水門はその使命を終り移りゆく年月と共にその面影を僅かに残すだけになり水路も年と共に埋り百五十町歩を潤した水路とは言えぬ姿になっております。

平成元年十月先人の苦勞を偲び黒川堰発祥の記念碑が建立されました。そして改良区役員年一度は足を運んでおります。

文化財

②

中大池の馬頭観音

昭和五十七年九月に、宗教学者として著名な五来

考古学

②

あれこれ

縄文土器

釣手土器

この土器は殿村遺跡から発掘されましたが、形を復元できた約四〇〇個体の土器の中でこの二点しかありません。縄文時代中期中葉から後葉にかけて中部地方から関東地方を中心に発達した器形で、吊り下げるために紐を通す部分があることからこの名が当てられていると推定されています。また、土器の内部にタール状の付着物が

重氏によって、初めて道祖神の男根型石棒の前面半分に、地蔵様の代りに馬頭観音を刻んだものであると指摘された珍しい石仏である。

氏によると、これは男根型道祖神信仰から地蔵信仰または観音信仰への転換を示す鍵をもつ貴重な石仏であるとい

い、昭和六十三年には福井県立博物館で開催された「石と人びとのくらし」という特別展に乞われて出品されている。

高さ三〇cmほどの小さい石仏で、表から見ると光背をつけた馬頭観音像であるが、裏にまわって見ると、明らかに縄文期の遺跡からよく出土する男根型の石棒であることが

見られるものが多いことから、この土器に獣の油を入れ、ランプとして使用されたと考えられます。

しかし、その数が少ないことから、各家で使われたものでなく、特別な家―祭祀を司る―で使われたものと思われる。自然の恵みのなかで生きていた縄文人たちが、このランプに神の火を灯し、豊かな恵みを祈っていたのでしよう。

山形村では、三夜塚遺跡からも二点出土しており、そのうちの一点が松本城の民俗資料館に展示されています。



わかる。おそらく日本に二つとない「石棒馬頭尊」である。

